党機関紙の力

……もしわれわれが、自分たちの組織を強化し、自分たちの党を団結させ、党をもっと密接に大衆と結びつけ、プロレタリアの広範な層にたえず働きかける党機関紙をつくりだすことができるなら、われわれは、この道で 10 倍も多くのことをやれるということをみとめる勇気をもちたまえ。われわれが努力をむけているのは、まさにこのことである。口先ではなく、実際に日和見主義とたたかおうとのぞんているすべての人々の努力がむけられなければならないのは、まさにこのことてある。

第 15 巻Ｐ 378 ～ 379『ボリシェヴィズムの戯画』

ポイント　　『プロレタリー』第44号付録、1909年4月4（17）日

働きかける内容は、**革命党の言葉づかい**で、**ほんとうの社会民主主義者**の観点で、**不断の一瞬間も見うしなってはならない目標**を持って**党（員）の任務**を遂行するように、**ほんとうに生き生きとした機関紙**を作ることである。

おくれた新聞はほろびてしまう

ところで『ネフスキー・ゴーロス』は勢いよく攻勢にで、いっそうけんかごしである。労働者に意見の相違をかくすのは（「プラウダ』がやっているように)、してはならないことであり、有害で、破滅をまねくものであり、わらうべきことである。**反対者**である『ネフスキー・ゴーロス』に、意見の相違についてのおしゃべりを**はじめ**させてはならない。「通俗的」、「積極的」な**だけ**の機関紙としてでは『プラウダ』は**ほろびるだろう**ということに、疑う余地はない。

『プラウダ』が論争をおそれることなく、解党派のことをはっきりと述べ、アクセリロードにたいする論戦や評論などによって活気づくならば、それはきっと勝利するだろう。アクセリロードの論文のような論文は、人をひきつける。すなわち、労働者は意見の相違について**すべて**を聞いて、われわれの百倍も大胆に**言いきっている**アクセリロードの公然たる説明に**ひきつけられる**のである。労働者は**みな**単一の政綱についてのおしゃべりを聞いているし、労働者の指導者はみなアクセリロードの評論を知っている――もし君がだまりとおすなら、君はおくれてしまう！　だがおくれた新聞はほろびてしまう！　新聞は、**『ネフスカヤ・ズヴェズダ』**も**『プラウダ』もまっさきに**すすまなければならない。『プラウダ』は二つの「積極的」な小論文とならんで、**論戦**をのせ、カーメネフの文献的小論や、解党派をあざわらった評論などをのせなければならない。単調とおくれることとは、新聞とはあいいれないものだ。『プラウダ』にはなお、特殊の、きわめて重要な義務が負わされている。「『プラウダ』はだれを**導く**のか」――これこそ**だれも**が質問し、**だれも**が行間に読みとっていることである。ここで（四年に一度、選挙前に）会うことが重要だ――ときたまではあっても、常時の寄稿家と会わずには、新聞をやっていけるものではない。このことをよく、また早急に一考したまえ。というのは、もう猶予はないから。

お元気で。　　**ウリヤーノフ**

第 35 巻『新聞『ネフスカヤ・ズヴェズダ』編集局へ』P28～29

クラコフからペテルブルグむけ　　1912 年 7 月 24 日執筆

ポイント

機関紙は、「通俗的」、「積極的」なだけではほろびるだろうということに、疑う余地はない。機関紙は、論争をおそれることなく、論戦や評論などによって活気づくならば、それはきっと勝利するだろう。

機関紙にはなお、特殊の、きわめて重要な義務が負わされている。 機関紙は、だれを導くのか、――これこそが最も重要なことだ。

労働者新聞のあり方について

新聞『プラウダ』編集局へ

親愛な友よ！　われわれのあいだで生き生きとした、きわめて活発な文通がおこなわれていたのは、理論問題だけ、書物だけ、理論だけについてであって、われわれ双方が最近かなり密接に参加しなければならないロシアのジャーナリズム上の緊急問題については、われわれのあいだに文通がおこなわれたことがかつてないということを、諸君は不思議におもわないだろうか？

私としては、このことを不思議におもっている。……

さらにピーテルの二つの労働者新聞について話し合ってみたい。『ルーチ』は無原則で、卑劣だ。これは新聞ではなく、社会民主党の候補者を「たたきおとすためのリーフレット」だ。しかし、この新聞はたたかう能力をもっている。それは生きており、たくましい。ところが、いま選挙にあたって『プラウダ』は、ねぼけたオールド・ミスのようにふるまっている。『プラウダ』は、たたかう能力をもっていない。『プラウダ』は、カデットをも解党派をも攻撃していないし、追求していない。ところで、先進的な民主主義派の機関紙が忙しい時期に戦闘的な機関紙で**ない**というようなことがありうるだろうか？　よいほうを仮定しよう、つまり、『**プラウダ**』が反解党派の勝利を確信していると仮定しよう。**それでも**、なにが問題か、**だれが**選挙をぶちこわそうとしているか、**どんな思想**のために闘争がおこなわれているかを、**国中**に知らせるために、たたかわなければならない。『ルーチ』は凶暴に、ヒステリックに、自分の原則をまったく恥知らずに放棄して、たたかっている。『**プラウダ**』は――『ルーチ』へのつらあてに――「もったいぶり」、気どっており、全然たたかっていない！！　これはマルクス主義らしいことだろうか？　マルクスは、きわめて情熱的、献身的、仮借ないたたかいと、完全な原則性とを結合する能力をもっていたではないか？？　　注)……は青山の略

第 36 巻『新聞『プラウダ』編集局へ』P212~213

1912 年 10 月に執筆

ブルジョアジーの宣伝とプロレタリアートの宣伝

資本主義のもとでの「勤労」農業の進歩をほめたたえるものはみな（わがナロードニキ左派をもふくめて）、労働者を欺瞞するブルジョアである。欺瞞は、第一に、ブルジョアジーを美化している点にある。賃労働の搾取者が、「勤労」経営主と呼ばれているのだ！第二に、欺瞞は、大多数を占めるプロレタリア的経営とごく少数の資本主義的経営とのあいだにある深淵をぬりかくしている点にある。

ブルジョアジーの利益は、資本主義を美化し、階級間の深淵をぬりかくすことを要求する。プロレタリアートの利益は、資本主義と賃労働の搾取とを暴露することを要求し、階級間の深淵の深さに大衆の目をひらかせることを要求する。

第 19 巻 P388『ブルジョア諸君の「勤労」農業論』

『ナーシ・プーチ』第15号、1913年9月11日

ポイント

ブルジョアジーの利益は、資本主義を美化し、階級間の深淵をぬりかくすことを要求する。プロレタリアートの利益は、資本主義と賃労働の搾取とを暴露することを要求し、階級間の深淵の深さに大衆の目をひらかせることを要求する。

労働者新聞が提供すべきこと、提供すべきでないこと

労働者新聞は、プロレタリアートの意識からブルジョア観念論のまざり物を洗いきよめるべきであって、その紙上でこの消化の悪いごった煮を提供すべきではない。

第 20 巻 P122『ア・ボグダーノフについて』

『プーチ・プラウドィ』第 21 号、1914 年 2 月 25 日